

# 美術科教育学会通信 No. 67 2008. 2. 16. 発行

通信事務

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 創造科学系 美術教育講座内 美術科教育学会本部事務局

事務局 E-mail/bikiga@m.uecc.aichi-edu.ac.jp

藤江充(学会代表理事) - 研究室 TEL0566-26-2444

磯部洋司(事務局長) - 研究室 TEL0566-26-2447

樋口一成(広報担当) - 研究室 TEL0566-26-2449

〈三重大学〉上山浩 (Web 担当) E-mail/ueyama@edu.mie-u.ac.jp

## 第 30 回美術科教育学会群馬大会のご案内 (最終)

第 30 回大会の日程、研究部会コロキウム、口頭発表等の詳細が決定しましたのでお知らせします。

1. 会 期：平成 20 年 3 月 28 日 (金) ~ 30 日 (日)
2. 会 場：群馬大学荒牧キャンパス G 棟(研究発表)、大学会館 (懇親会)
3. 大会テーマ：美術教育の草の根—理論と実践の連関—

大会テーマは、今回の大会が第 30 回という美術科教育学会にとって節目に当たることをふまえ、美術教育の存立基盤そのものに立ち返り、本学会及び美術教育研究の役割や意義を再確認し合う場にしたいと考え、設定したものです。

次期学習指導要領の告示が今年度中に行われる予定ですが、前回改訂で削減された図工・美術の授業時数は現状維持のままです。教員免許法の改定に伴い、教員養成課程における教科専門科目の履修単位が半減し、教科に対する力量形成の問題も生じています。加えて、美術教育の理念や方法に対する議論は未だ整理されておらず、当事者間においてさえ教科に対する共通理解が不十分という現状があります。「少ない授業時数」「教員養成段階における教科に関する力量形成の問題」「美術教育に対するコンセンサスの不足」等々、今日の美術教育はこれまで以上に大きな困難に直面しているといっても過言ではありません。

こうした厳しい状況をかんがみる時、迂遠なようにみえても、自らの足元を見つめ、地に足を着けた研究や議論を積み重ねることによって、美術教育の足腰を鍛えることが必要ではないでしょうか。

創立30年を迎える本学会は、これまで特に理論研究を中心に優れた成果を上げてきました。しかし今後は、これまでの実績をふまつつ、現実的・実地的な課題についてもさらに研究を深め、社会の要請に応えることが求められていると思います。

美術教育に関心を抱く多くの方々に参加していただき、美術教育の足腰を鍛える充実した研究発表と活発な議論が展開できることを期待します。

◆第 32 回 InSEA 大阪大会への登録方法について ⇒ 6 ページに掲載しています。

#### 4. 日程

第1日	受付	開会 行事	研究部会コロ キウム(アート セラピー, 授業)	研究発表①	理事会
3/28(金)	12:00-	13:00 -13:20	13:30 -15:30	15:40 -17:30	17:40 -19:00

第2日	受付	研究発表②	昼食	研究部会コロキ ウム(工作・工 芸領域, 美術教 育史) 13:00	研究発表③	懇親会
3/29(土)	8:30 -9:00	9:00 -11:50		-15:00	15:10 -17:25	18:00 -20:00

第3日	受付	研究発表④	学会総会 閉会行事
3/30(日)	8:30 -9:00	9:00 -11:15	11:25 -12:30

#### 5. 主な内容

■研究発表：当初 80 件の申込みがありましたが、最終的に研究発表は 77 件になりました。

■研究部会コロキウム：現在活動している 4 つの研究部会の協力を得て行います。

「アートセラピー研究部会」（代表：長谷川 哲哉）

\*テーマ：アートセラピーは我々に何をもたらすか？—美術教育の可能性の開拓へ向けて—

\*内 容：2006 年度研究会の内容報告

口頭発表 1：栗山 裕至（佐賀大学）

口頭発表 2：吉田 悦治（琉球大学）

「授業研究部会」（代表：新井 哲夫）

\*テーマ：図画工作・美術科の「授業」とは？—校種を超えた共通理解の形成を目指して—

\*内 容：パネルディスカッション

パネリスト 刑部 育子（お茶の水女子大学）「幼児教育の立場から」

足達 哲也（群馬大学教育学部附属小学校）「小学校教育の立場から」

人見 和宏（滋賀県大津市立栗津中学校）「中学校教育の立場から」

コーディネーター 大泉 義一（横浜国立大学）

「工作工芸領域部会」（代表 西村 俊夫）

\*テーマ：子どもと素材—素材・材料から工作、工芸教育について考える—

\*内 容：研究発表 1. 山之内 知行（上越教育大学附属小学校）「わりばしでコラボ」

研究発表 2. 石井 大資（上越市立城北中学校）「藍のかたち～藍染めのさまざまな表情を  
さぐる～」

コーディネーター 西村 俊夫（上越教育大学）

パネリスト 齊藤 学（山形大学）、  
山之内 知行（上越教育大学附属小学校）  
石井 大資（上越市立城北中学校）

「美術教育史研究部会」（代表：金子 一夫）

\*テーマ：美術教育史資料調査研究の実際的諸問題

\*内 容：発表者 金子 一夫（茨城大学）「図画教員の資料調査」

長瀬 達也（秋田大学）「秋田県自由画教育の資料調査」

有田 洋子（常磐大学高等学校）「戦後鑑賞教育文献の資料収集」

岡崎 昭夫（筑波大学）「ダウ関係マイクロフィルム資料の調査」

## 6. 参加申込み方法

(1) 学会参加費……5,000円／懇親会費……4,000円 [学部生・院生 2,500円]

(2) 参加申込み最終期限：平成20年3月14日（金）

\*参加申込み及び参加費・懇親会費の払い込みは、振替払込書に必要事項をご記入の上、下記の運営事務局口座にお振り込みください。

口座番号：00180-4-583302

口座加入者名：第30回美術科教育学会群馬大会運営事務局

\*通信欄に、「学会参加費」「懇親会費」の金額（含、合計金額）、住所、所属（院生は〇〇大学大学院在学と学生であることを明記のこと）、氏名、電話番号等を記入してください。

\*当日受付も可能ですが、大会運営上できるだけ事前にお申し込みください。なお、3月14日以降は口座に振り込まず、当日受付にてお支払いください。

## 7. 会場までのアクセス

\*JR両毛線「前橋駅」北口1番乗り場（関越交通バス）：群馬大学荒牧経由渋川駅行「群大荒牧」下車，所要時間28分）／渋川市内循環 渋川駅行「前橋自動車教習所前」下車，所要時間25分＋徒歩10分）

\*JR上越線「渋川駅」バス乗り場（関越交通バス）：群馬大学荒牧経由前橋駅行「群大荒牧」下車，所要時間29分）／渋川市内循環 前橋駅行「前橋自動車教習所前」下車，所要時間28分＋徒歩10分）

## 8. 問合せ先

〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 群馬大学教育学部美術教育講座内

第30回美術科教育学会群馬大会運営事務局

運営委員長：新井 哲夫 TEL&FAX:027-220-7316/E-mail:arai@edu.gunma-u.ac.jp

同副委員長：茂木 一司 TEL&FAX:027-220-7310/E-mail:mogi@edu.gunma-u.ac.jp

# 第30回美術科教育学会群馬大会 研究発表等一覧

研究発表20分、質疑応答10分、交代5分  
表中の略号:◎液晶プロジェクター, ◎OHP, ◎スライドプロジェクター, ◎VHSビデオ

## 第1日 3月28日(金)午後

12:00-	受付				
13:00-13:20	開会行事 会場B-155				
研究発表① (室番号)	A (GB-155)	B (GB-154)	C (GA-202)	D (GA-302)	E (GA-308)
13:30 <b>研究部会COLLOQUIUM</b>	/			アートセラピー研究部会	授業研究部会
15:30	鑑賞教育・美術館・批評	授業研究・題材開発	特別支援/描画	工作・工芸	実践
15:40 <b>1</b>	美術作品の鑑賞における児童の創造的思考活動の支援 ②	美術教育ぐんま塾の試み—ある美術教育研究会の軌跡と展望— ②	パブリックアート鑑賞—発達障害児の実践から— ②	ものづくりにおけるデザイン的思考と身体的知性の関係について	現在の美術教育実践と「美術」の多様性の関係について ②
16:10	藤原伸彦(鳴門教育大学) 山田芳明(鳴門教育大学)	飯塚淑光(鬼石町立鬼石中学校) 新井哲夫(群馬大学)	加藤真也(愛知県立大学養護学校)	佐藤真帆(ローハンプトン大学大学院)	片岡杏子(東京学芸大学大学院)
16:15 <b>2</b>	作品を鑑賞する「場」の創造—「大竹伸朗と別海展」からの考察 ②◎	高等学校普通科美術コースにおける美術カリキュラムについての考察	発達障害児に対する造形活動の支援に関する一考察 ②	自然素材の視覚化—蔓を編む・織むという行為を通して— ②	教材開発を通じた表現教育のあり方に関する実践研究 ②
16:45	三橋純予(北海道教育大学)	佐々木六(芦屋大学附属中・高等学校)	山崎寛子(横浜国立大学大学院)	梅田みどり(京都教育大学大学院)	矢野 真(鎌倉女子大学児童学科)
16:50 <b>3</b>	鑑賞支援における分析的要素、表現的要素、コミュニケーション的要素の連関とその整理の試み ②	デフォルマシオンによるリアリティ絵画教育研究—フランス・ペイコンからのアプローチ—	/		図画工作科における実生活を想定した題材構成—居心地のよい空間づくりのためのランプシェードの製作— ②
17:20	森 芳功(徳島県立美術館)	石垣倫生(近畿大学附属高等学校)			森坂実紀人(群馬大学教育学部附属小学校)
17:30-19:00	理事会				

## 第2日 3月29日(土)午前

研究発表② (室番号)	A (GB-155)	B (GB-154)	C (GA-202)	D (GA-302)	E (GA-308)
	鑑賞教育・美術館・批評	小中連携/芸術家との連携	幼児教育/色彩教育	中学校・思春期の教育	美術教育史
9:00 <b>1</b>	鑑賞教育における題材観—地域から世界への視点— ②	図画工作・美術科教育における「小中連携—一貫教育」の現状と仮題 ②	幼児の粘土遊び—生き生きとした表現をめざした保育的方法の研究— ②	「見立てる力」の育成と価値の創造—中学校美術科を中心とした「見立て」による創造活動の研究— ②	『ビジョン・イン・モーション』(1947)にみる1930-40年代のシカゴにおける・モホリ=ナギの芸術教育観 ②
9:30	蝦名敦子(弘前大学)	宇田秀士(奈良教育大学) 岡田陽子(大阪府河南町立石川小学校)	神谷隆代(成田国際福祉専門学校)	丸山圭子(東京学芸大学大学院)	普照潤子(神戸大学大学院)
9:35 <b>2</b>	美術作品鑑賞活動における対話と作品理解の関係について ②	小・中学校の経験から、小中連携の仮設—「造形遊び」の発想でつなぐ、造形活動の面白さ— ②	どのような言葉かけが幼児の発想を支援するか?—幼児の見立て絵の一事例をとおして— ②	中学校での色彩学習はどこまで可能か—選択美術「色彩コース」での実践報告— ②	阿部七五三吉の手工教育論 ②
10:05	山田芳明(鳴門教育大学) 和田咲子(イタリア国立ピサ大学)	岡田陽子(大阪府河南町立石川小学校) 宇田秀士(奈良教育大学)	若山育代(広島大学大学院)	片桐 彩(相模原市立上溝中学校)	平野英史(東京学芸大学)
10:10 <b>3</b>	イタリア国立美術館の教育普及活動:鑑賞活動実践 調査報告 ②	幼・小・中連携教育の研究から「子どもの成長の4ステージをめやすとした造形活動の試みII」②	保育学科学生の子どもの絵に対する意識 ◎	青年期の美術教育における選択式課題の有効性に関する実践研究 ②	『昭和33年度版 小学校学習指導要領 図画工作』における「目標」に関する研究 ②
10:40	和田咲子(イタリア国立ピサ大学)	名達英詔(東京学芸大学附属竹早小学校)	松井寿美子(聖カタリナ大学短期大学部)	内藤真理子(横浜国立大学大学院)	中村元隆(東京学芸大学大学院)
10:45 <b>4</b>	ミュージアム・ラーニング:美術館・博物館の垣根を超えた学びが美術教育に与える意味 ②	NPOがつなぐ美術館・芸術家と学校の連携授業 ◎	子どもの視覚表現と基本的色彩語獲得量との関係—視覚表現にみられるカラーカテゴリーの効果—	中学校美術科教育におけるデザイン教育に関する研究—デザイン思考を育てる題材開発の試み— ◎	近代女子図画教育にみる教科の枠組み—家事・裁縫科目との関連から— ②
11:15	井上 由佳(国立歴史民族博物館(非) / 立正大学(非))	津屋有季(京都教育大学大学院)	石栗能子(女子美術大学大学院)	小泉 薫(群馬大学大学院/お茶の水女子大学附属中学校)	山崎明子(お茶の水女子大学)
11:20 <b>5</b>	単元「国吉康雄オリジナル美術館を創る」の分析と考察—生徒が自覚した美術科の学びとは— ②	「アーティストが学校に」—アーティスト・ゲストとの連携による造形活動の実践— ②	認知的・心的特性の分析に基づく造形活動の個人差に関する一考察—内に向かう表現・外に向かう表現— ②	中学校現場での美術科テストの活用と現状—日米のテスト法の比較を通して— ②	手工教育揺籃期の研究 その一 ◎
11:50	森 弥生(岡山市立岡北中学校) 赤木里香子(岡山大学)	荒川洋子(新潟市立白根北中学校)	新妻悦子(アトリエ・コバン美術教育研究所)	山田洋揮(愛知教育大学大学院/名古屋市立楠中学校)	宮坂元裕(帝京平成大学)

第2日 3月29日(土)午後

研究発表③ (室番号)	A (GB-155)	B (GB-154)	C (GA-202)	D (GA-302)	E (GA-308)
13:00 研究部会COLLOQUIUM 15:00				工作・工芸領域部会	美術教育史研究部会
	鑑賞教育・美術館・批評	授業研究・実践力養成	実践・教材開発/絵画・描画学習	ワークショップ	美術教育史
15:10 6	美術館における教育現場との連携についての意識—アンケートから見えてきた美術教育の課題— (P)	現代アート作家との出会いを通じた実践についての一考察 (P)	表現活動における環境芸術の教材化についての一考察 (P)	アートワークショップによる実践的指導力の養成に関する事例研究—教員養成課程と関連して— (P)	普通教育における造形ムーブメントの研究 I—日本の民間美術教育運動と造形教育センターの活動 I— (P)
15:40	半直哉(山陽学園短期大学)	中田 稔(美作大学短期大学部)	橋本忠和(兵庫教育大学大学院)	下原美保(鹿児島大学) 茂木一司(群馬大学) 小田久美子(鹿児島大学大学院)	小林貴史(東京造形大学)
15:45 7	スミス(Ralph Smith)の美的批評教育に関する研究	親子造形を通じた子育て支援活動—地域の絵画造形教室ができること— (P)	描画活動における子どもの発話の聞きとりに関する一考察 (P)	地域風土の中の自然素材を生かした造形活動—ファシリテーター体験による実践を通して— (P)	普通教育における造形ムーブメントの研究 II—桑沢学園と普通教育における造形教育 I— (P)
16:15	和田 学(龍ヶ崎市立城西中学校)	赤座雅子(キッズ・クラフト子ども絵画造形教室)	藤原逸樹(安田女子短期大学/広島大学大学院)	渡辺一洋(育英短期大学)	春日 明夫(東京造形大学)
16:20 8	美術教育における「批評」の役割—アメリカ美術教育思潮についての考察をもとに— (P)	授業実践力を持った美術教育教員養成のためのカリキュラム検討—附属中学校との連携協力による授業実践の試み— (P)		ファシリテーションによる鑑賞学習 (P)	昭和30年代のデザイン教育の諸相 (P)
16:50	山木朝彦(鳴門教育大学)	高橋智子(静岡大学)		小崎 真(兵庫教育大学大学院/愛知県豊明市立豊明小学校)	新聞伸也(滋賀大学)
16:55 9	鑑賞スキルの熟達化と転移に関する一考察 (P)	アートライティング教育の可能性を求めて (P)	自己表現を育む絵画制作の指導	ワークショップ—アートの可能性として (S)(P)	韓国における1970年代の雑誌『デザイン』にみるデザイン教育に関する研究
17:25	王文純 石崎和宏(宇都宮大学)	直江俊雄(筑波大学)	八木遼蒼(大阪府立三島高等学校)	岡本康明(京都造形芸術大学)	韓 希暻(筑波大学大学院)
懇親会 18:00-20:00	大会会館				

第3日 3月30日(日)午前

研究発表④ (室番号)	A (GB-155)	B (GB-154)	C (GA-202)	D (GA-302)	E (GA-308)
	鑑賞教育・美術館・批評	メディア・ITCなど	中学校・思春期の教育	総合学習・プロジェクト学習・アート学習	美術教育史
9:00 1	美術鑑賞に関わる言語の機能について	メディアとしての子どもの造形表現—拡張と統制に関する一考察— (P)	[思春期の美術教育1] 思春期の美術教育とその課題 (P)	表現発表プロジェクトによる総合的な能力の育成—造形教育の関わりと可能性— (P)	Zen49・初期ドクメンタに参加したカッセル芸術大学教授F・ヴィンターの芸術観とその表現世界について—ナチス崩壊後ドイツにおけるバウハウス第二世代教授層の芸術観を手掛りとして—
9:30	大古静香(京都教育大学大学院)	村松和彦(宇都宮大学教育学部附属小学校)	新井哲夫(群馬大学)	大塚習平(湖北短期大学)	鈴木幹雄(神戸大学発達科学部)
9:35 2	作品との関わり方を学ぶ鑑賞遊び	3Dアニメーション制作指導におけるPBLとピア・サポートの導入 (P)	[思春期の美術教育2] 発想・構想を促す鑑賞と表現の一体化 (P)	「ひらく」「おこす」「であう」—連動するアート教育のダイナミズム— (P)	戦後の美術科教科書における掲載作品の研究—色彩に関する題材におけるキャプションの考察 (P)
10:05	濱口由美(徳島市立富田小学校)	上山 浩(三重大学)	飯塚清美(高崎市立塚沢中学校)	谷口幹也(九州女子大学) 相田隆司(東京学芸大学)	山口喜雄(宇都宮大学)
10:10 3	子どもが見出す美術作品の価値に関する研究—関心と思考・判断のつながりによる読み取りの深さを目指して— (P)	国際バカロレアMYPを視野に入れた実践研究—海外交流授業及び美術館での活動を中心にして— (P)	[思春期の美術教育3] 思春期における絵画表現の可能性—3年間の指導の継続を通して— (P)	身体・映像・音を使った彫刻表現の実践的研究—The singing sculptureの解釈を通して— (P)	主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力の育成に関する考察 (P)
10:40	武田信吾(大阪教育大学附属天王寺小学校)	小池研二(東京学芸大学附属国際中等教育学校)	本田智子(高崎市立倉賀野中学校)	木村典之(大分大学教育福祉科学部附属中学校)	立原慶一(宮城教育大学)
10:45 4		ストレスマネジメントと造形教育についての一考察 (P)	[思春期の美術教育4] 思春期の子どもの自己肯定感を高める表現指導—ナラティブ・セラピーの考え方を生かして—	味わいアートの提案—からだに取り入れることの意味を探る— (P)	美術教育で学ぶもの—風景について
11:15		岡 照幸(国立音楽大学附属小学校)	上林忠夫(高崎市立群馬南中学校)	郡司明子(お茶の水女子大学附属小学校)	山下暁子(東京学芸大学院連合学校教育学研究科)
学会総会 11:25-12:15	会場 B-155 学会総会・閉会行事				

## 事務局からのお知らせ(重要)

### 第32回 InSEA 大阪大会への参加・発表登録について —美術科教育学会の会員は登録料が割引になります—

2008年8月5日(火)～9日(土)に大阪国際交流センターで、InSEA(インセア・国際美術教育会議)が開催されます。美術科教育学会も協賛団体としてその運営等に協力していくことは既に理事会・総会等でも承認され周知のことと思います。

その国際会議への参加・発表の登録受け付けが始まっています。参加・発表を希望される方は、下記のホームページ(URL)までアクセスして下さい。大会テーマや登録方法、日程等が紹介されています。

<http://www.convention-j.com/InSEA-WC2008osaka/ja/>

美術科教育学会の会員は、協賛団体の所属会員ということで、登録料が、1万円に減額されます。ただし、登録時に、美術科教育学会の会員専用のパスワードを入力する必要があります。パスワードは慎重に扱う必要があります。通信やサイトにそのまま載せる分けにはいきません。InSEA大阪大会への参加・発表を希望される会員は、メールで下記の美術科教育学会本部事務局までお問い合わせ下さい。その際に、「お名前(所属)、住所」を記して下さい。電話等では受けつけていません。必ずメールでお願いします。

美術科教育学会本部事務局

bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

なお、参加だけでなく、研究発表を希望される場合は、InSEA(International Society for Education through Art)の会員であることが必要です。InSEAの入会手続きについても、InSEA大阪大会のURLで紹介していますので参照して下さい。

InSEA大阪大会関連の日程の一部は以下のようになっています。

発表(ブロード)の受け付け締め切り—2008年3月31日

早期参加登録申し込み締め切り—2008年4月30日

最終参加登録申し込み締め切り—2008年6月30日

### ●InSEA大阪大会での学会企画シンポジウム

大会での学会企画シンポジウムについては、担当理事と代表理事で協議して原案を作成し、全理事にその案をメールで照会中です。現在の段階では、以下のような進行状況です。

---「InSEA大阪大会での協賛団体として美術科教育学会からは、既に、大会事務局の準備や運営に理事や会員がかかわっています。その点で、学会独自のプロジェクトを企画し運営することについての議論もありましたが、学会としての企画を立てました。

テーマを「美術教育における感性の問題」(仮題)として、コミュニケーション、視覚文化(ビジュアル・カルチャー)、そして美術教育における能力(コンピテンシー等)の問題を検討していきたいと思っています。「感性」という言葉がもつ多様性や美術教育でのその解釈のゆらぎなどについての話し合いを通して、美術と社会とのかかわり方、子どもの生活感覚と学校の美術教育とのかかわりなどを、美術教育の視点から展望できるようにしたいと考えています。

現時点では、美術教育での認識(認知)活動の重要性を論証した“Art & Cognition”の著者である米国オハイオ州立大学名誉教授のA.エフランド博士を招いて基調提案をいただき、美術と認知について日本の研究者、感性と美術教育とのかかわりを強く意識されている研究者・実践者、「感性」と言う漢字を美術教育の場で共有できるアジアの美術教育者、学習指導要領などの行政文書における感性について話ができる方、などにシンポジストとしての参加を呼びかけているところです。』(『教育美術』掲載予定原稿)-----

3月の群馬大学での大会に際には、もう少し詳しくご照会できると思います。会員の皆様から提案や意見等がありましたら、美術科教育学会本部事務局までメールでお寄せ下さい。

# 報 告

## 東地区会の報告 I

### ■美術科教育学会第2回東地区研究会報告

2007年度・美術科教育学会第2回東地区研究会 in Chiba（聖徳大学）は、「鑑賞教育を考える」というテーマで、19年10月27日（土）（13:00~17:00）に千葉県松戸市の聖徳大学美術教室で行われました。

当日はあいにく関東地区に小台風が、接近し暴風雨の中の開催となりました。しかし藤江充（学会代表理事）を始めとして宮脇理（地区担当理事）他、40数名の参加者があり成功裡に終了することが出来ました。参加者の皆様方には、深く感謝いたしております。

この度は、幼児から成人までの鑑賞教育について再考してみようということから、平凡と思われるようなテーマにいたしました。学校教育を終わった人々の多くが美術の鑑賞者になるのだとすれば、学校教育においては必然的にそれらの人々に感謝される鑑賞教育が十分に在学中になされていなければならないということを考え、それを前提に、以下のような研究発表（聖徳大学教員による）が行われました。

（研究発表） 13:00~16:00

- ① 「美術教育におけるこれからの鑑賞教育」  
（遠藤友麗）
- ② 「対話型鑑賞教育の取り組みから  
—対話の意味と鑑賞教育への位置づけ—  
（小泉 卓）
- ③ 「幼児の鑑賞教育への提言」 （仲瀬律久）
- ④ 「開かれた鑑賞教育：越後妻有アートトリ  
エンナーレ」 （大成哲雄）
- ⑤ 「美術鑑賞と環境（聖徳学園の場合）」  
（長谷川晶子・島田由紀子）

（研究協議） 16:10~17:00

休憩を挟んで、藤江代表理事の挨拶及び宮脇理事から東地区研究会開催の経緯について話があり、その後、上記の研究発表をめぐって熱心な質疑応答がなされました。

- \* 発表内容については当日発行の小冊子に記載されています。  
ご希望の方は下記にお問い合わせ下さい。
- \* お問い合わせ先：小泉 卓（こいずみ・たかし）

E-mail koizumi@seitoku.ac.jp



（東地区研究会発表風景；藤江充代表挨拶）



（東地区研究会発表風景；宮脇理理事挨拶）



（東地区研究会発表風景）



（東地区研究会発表風景）

## 東地区会の報告Ⅱ

### ■美術科教育学会第3回東地区研究会報告

平成19年度第3回東地区研究会の報告を致します。はじめに研究会のテーマ、開催の日時、場所、パネリストと司会及び指定質問者を記載し、次に、研究会の趣旨と当日の発表内容の概要をまとめます。

【テーマ】「学校と連携を進める美術館-過去・現在・未来」【日時】2007年11月10日（土曜日）午後1時から午後5時（当日、参加者の同意を得て午後5時30分まで延長）【場所】東京都写真美術館創作室【パネリスト】宮脇 理（学会理事・元筑波大学教授・横浜美術館子どものアトリエ企画委員）、山木朝彦（学会理事・鳴門教育大学）、仲野泰生（川崎市民ミュージアム）、塚田美紀（世田谷美術館）、石田哲朗（東京都写真美術館）【司会】井上由佳（国立歴史民俗博物館）【指定質問者】小崎 真（兵庫教育大学連合大学院生・愛知県立豊明小学校教諭）

本研究会は、近年、小学校や中学校、そして高校と各地の美術館が連携して鑑賞教育を展開する教育実践が進展している状況について、美術館の教育普及に携わる学芸員や計画立案のプランナーの立場から、連携の成果と問題点を明らかにする試みである。前半はパネルディスカッションの形式に則り、横浜美術館子どものアトリエ、川崎市岡本太郎美術館、世田谷美術館、東京都写真美術館での教育普及活動を紹介するとともに、それぞれの実践の根底にある芸術観や教育観を自由に語って頂く形式をとった。実践の紹介と各自の思想を絡めて語って頂くこの発想は、当研究会の企画者である山木が科研費の枠組みのなかで行ったインタビュー（2006年）の内容から生まれたものである。この聞き取り調査によって、美術館による学校連携の鑑賞教育の取り組みは、組織だった館全体の計画的運営と共に、学芸員諸氏による鑑賞教育に対する考え方やアプローチに大きく依存していることが明らかとなった。また、教育普及を担う学芸員の見識が質的に高く、そこに、図画工作や美術に携わる教員や研究者にとって示唆的な思想を読み取ることができたからである。

当日は、雨天であったにもかかわらず、JR 恵比寿駅から数分という地の利を得て、約80名の参加があった。発表内容を記すと次のようになる。

1. 山木：本研究会の企画趣旨として、a) 公共的世界の中での鑑賞教育の役割、b) 多様な価値に基づく多種多様な方法論を認め合うこと、c) ジャンルにこだわらず写真・デザインや、より身近な造形に向かって鑑賞対象を広げることが必要だと述べた後、知的アプローチの好例と考えられ



(東京都写真美術館 会場風景)



るタイト・ギャラリーの実践と徳島県立近代美術館の実践を紹介した。

2. 塚田：世田谷美術館の実践の基本的アプローチは子どもの個性を最大限重視し、「美術品」を人間が生きるといふ広い文脈のなかにおいて理解できるようにすることである。身体的・知的アプローチを駆使して、アートの楽しさを体現する学びを通じて公共的な世界のなかでの鑑賞の意味を子どもたちとともに模索している。

3. 石田：写真美術館と日常世界での写真一般にはつねにギャップがあることを認識し、つなげる回路をもつことが写真の教育普及活動として美術館が行うべきことの基本だと考えている。学校との連携のなかで写真を撮る意味と写真が新たなものの見方を切り開くことを子どもたちと共に考えている。

4. 仲野：「こんな日本ー岡本太郎が撮る×内藤正敏が撮る」展の出来上がるまでのプロセスで考えた作品鑑賞の意味を語るとともに、内藤氏の東北芸術工科大学での「子どもたちの写真」のワークショップとその展示について紹介した。子ども自らが撮った写真表現を写真家が批評し、子どもがその批評をどのように受け止めるかという批評を媒介にした学びについて考察している。

5. 宮脇：横浜美術館子どものアトリエの基本構想ができあがるまでの歴史的背景について、生涯教育の中での「市民のための美術館」というコンセプトの誕生や美術館に絡みつく教養主義の問題点をまじえて紹介し、新たな教育普及にとって望まれるアサーティブな視点を示唆した。

6. 井上：司会により論点を整理し、美術館にとっての学校連携のメリットや図工・美術といった教科の枠組みに縛られない普及のあり方についてパネリストに質問をした。また、イギリスで進む教育改革の目標や美術館の役割を総括した報告書についても論評した。

7. 小崎：指定質問者として、美術館と学校との連携にとって何が重要か、パネリストに質問するとともに、教師や学芸員にとってのファシリテーションの意味やそのあり方について、自説をもとにして問いかけた。

以上の流れによって、各館が実施している多種多様なアプローチを大きく括る新たな枠組みが浮かび上がってきた。それは、鑑賞者である子ども自身の生活世界に根付くアートの受けとめ方を重視するとともに、ジャンルを超えた造形世界へ橋渡しするプロセスにたいして、学芸員と教師はともに責任を持って、方法論を模索し、開発しなくてはならないということである。本研究会で、俎上に上げられ、検討された、知的アプローチや批評、そして、ファシリテーションなどの概念は今後の鑑賞教育の発展にとって重要であろう。なお、当日に配布したハンドアウトの補足版のプリントを作成中である。

(報告：山木朝彦)

## 東地区会の報告Ⅲ

### ■美術科教育学会第4回東地区会フォーラム報告

●テーマ「教育プログラムと美術教育のこれからーワークショップ理論・実践からの提案ー」

●日時／2007年12月1日(土) 13:30~16:00

●会場／東京学芸大学・20周年記念飯島会館

●主催／美術科教育学会東地区会+東京学芸大学美術・書道講座

#### ●フォーラム概要

・開会(宮脇 理/学会理事)

・ワークショップ理論・実践の今日

…<総論紹介>

・ワークショップ活動の実際

…<各論・事例紹介とパネリストディスカッション>

・閉会(柴田和豊/学会理事)

#### 【報告者・パネリスト】

茂木一司(群馬大学)・前田ちま子(名古屋芸術大学)・荻宿俊文(大東文化大学)・楚良 浄(東京都世田谷区立桜小学校)

●前半では、上記4氏の方々から実践・理論についてそれぞれに紹介していただいた。

□茂木さん

茂木さんは、過去5年間を振り返り、「アートな学びとアートの学び」の視点から話題提供された。はじめ「情報メディア時代の美術教育」からスタートし、やがてアートを基礎とする「楽しい学びの創造」へ。後半2年間の世界規模での取組では、文化的な摩擦と向き合い「文化を語る子どもたち」というテーマでワークショップを。さらに越後妻有アートトリエンナーレでの展示、前橋市内でカフェへとつながる。ワークショップを「共同的な学びが発生する場所」や「アクション」と捉え「共同的な学び」を起こさせる仕掛けの探究に勢力を注ぐ。人文・社会科学振興プロジェクトでは、「芸術とコミュニケーションに関する実践的な研究」を。また、障害児の美術教育に少しかかわりを持ち始めていたことから、アートエデュケーション・フォー・オールの考え方を立て、メディア系ワークショップを行う。しかし、その過程でコミュニケーションの発生させ方、人と人との結び付きのさせ方が盛り上げているということが明瞭となり、コミュニケーションを可視化することをテーマに。その後、バリの子どもたちを相手に、裏千家のお手前に「お茶箱」の仕組みを使って日本の美術文化についての体験的学習などの様子も紹介してくれました。

□荻宿さん

荻宿さんからは、「共同性の高い学習環境」に話題がすすむ。立命館大学での「自由な学びか、トレーニングか」という集会での問題提起のように、百マス計算では本当にこれから社会を担う子どもたちを育てられるのかという疑問を抱いていた。

ワークショップ実践の一例に「脳の鏡」というソフト開発をしていく。それは、子どもたちに自分の考えを外に出してほしかったこと、子どもがプロセスを語れるように。「僕はこのときこんなことを考えていたんだ」「私はこのときこうしようと思ったんだけど、うまくいかなかったからこちらに変えた」というように、プロセスを語れる環境づくりを模索・実践していった。表現では自らを語る、自らと対面するわけで自らを語るツールが必要だと。それを「プロセスの作品化」と呼んで、さまざまなものに援用していこうと企図する。その他にも、グッドデザイン賞を受賞した「Tシャツ型コミュニケーションツール」の話。「自らを語ること」とか、「プロセスの作品化」を考えているということとコミュニケーションを考えて、そういうきっかけを作るようなワークショップをデザインしてきた。参加者が自分のやっていることがわからないとワークショップがうまく成立しないという。自分のやっていることを客観できるように仕組みを作って提案していくことに。「ワークショップ」という「公共性の概念」の問題、シェアという公共的な感覚。公共性の感覚。いわゆる共同性、共感性というものを、どこかで教育の場を考える必要がある。人の立場に立って見ることを考えるのは人間しかできない。人間が人間になるということは、人の立場に立って見るができるかどうかにかかわっている。

□前田さん

美術館と社会施設におけるワークショップの実践事例を紹介していただいた。名古屋ボストン美術館での「はじめての出会い First Contact〜アメリカンアートにこんにちは!〜」『レーン・コレクション アメリカンモダニズム オキーフとその時代』展関連教育プログラム(2004)や、「GoGoびじゅつかん!」『ボストン美術館の巨匠たち〜愛しき人々』展関連教育プログラム(2005)を、国立国際美術館での「こども実験美術情報局」『プーシキン美術館展』こどものワークショップ(2006)、名古屋市美術館「ニキニキ・カーニバル」『ニキ・ド・サンファル展』関連プログラム(2006)の実践など。その他にも、社会施設での「ワークショップ実践事例」を交え、個人の鑑賞体験は子どもから大人になるまでに、幾つもの段階の積み重ねがあるのではないか。その一番の元のところに、自発的興味と関心、積極的探索行動が問題となるという。視覚活動や五感・身体筋肉運動を伴うプ

ログラムが必要であり、それを十分に積み重ねるうちに、造形実験や造形要素の概念的理解、対話型の鑑賞につながることを話していただいた。「ワークショップ」の意味について、日本特有の発展をした美術館の「ワークショップ」の意味や、『ハンズオン』『マンズオン』から学ぶもの、自己解放と他者とのコミュニケーションを活性化する役割についても話は広がった。

□楚良さん

楚良さんには、「開かれた図工室」の視点から日々の授業実践をもとに話していただいた。冒頭、この集会在「ワークショップ」を問題にしているにもかかわらず、「聞いている側と話している側が分かれて交流がないのでは」と鋭い切り込みで、思わず司会進行係も「はっ!」とわが身を振り返り驚く。楚良さんは、こんな関係性を克服するところから、学校での授業・生活に切り込んでいるようだ。「月曜日に朝会で子どもたちに話をする必要があります。そのときにも、まず皆さん元気です



(会場風景)

か。今日は記念撮影をしましょう」と。朝礼台の上から記念撮影をしたりホームページを編集したり、日々「図画工作と交わりについて」取り組んできた。ゲストティーチャー役を加えた場合の、ゲスト・教師・子どもの関係に話がすすむ。その場では「こちら（教師）が考えていること、ゲストの考えていること、子どもたちの受け取り方」をしっかり見据えて取り組む姿勢の大切さを示してくれた。その視点として、四つを挙げる。子どもたちが一人一人自分で、あるいは友達とかかわりながら何かをしていることを忘れずに、それを前提として①伝える関係、②響きあう関係、③受け止める関係、そして④出会いの関係を考えること。この四つを整理して、来てもらうゲストの人に、子どもたちにどう付き合っていたかかを話し合う。また、子どもたちの響き合う関係を促進するための方策について、たとえば、図工室内での子どもの動線を見てみたり、グループ内でのいろいろな出会いを求めて、題材ごとに座席をシャッフルしてみたり様々な取り組みを話してくれた。

●後半では「教育プログラムと美術教育のこれから」をテーマにパネルディスカッションに移り、パネリストの実践・成果・課題を引き継いで、学校教育におけるワークショップ活動の可能性、展望について、お考えを述べてもらい意見交換を。(報告文責/山田一美)

## お知らせ

### 東地区会のお知らせ

■2008 年度東地区会の企画・運営募集/年間 3~4 回程度の企画を募集しています。積極的にご提案ください。相談窓口→東地区会担当まで(地区代表/宮脇理事、又は山田まで)

## 事務局からのお願い I

◆先の「学会通信 66」に同封させていただいた〈会員名簿確認用の書類〉をまだご返送いただけない方は、至急本部事務局までお送りください。今後の学会の選挙や学会賞の選定などで各会員の情報が必要となりますので、よろしくお願い致します。

※お忙しい中、すでに書類をお送りいただいた会員の方々にはお礼を申し上げます。ありがとうございました。現在、本部事務局に書類が届いた順に、会員名簿の修正や追加の作業を行っておりますが、全作業が終了するまでには約2ヶ月間ほど掛かる予定です。緊急に修正や訂正が必要な事項を書類にお書きいただいた方は、お手数をお掛けしますが、同じ内容を本部事務局までメールにてお知らせください。よろしくお願い致します。

## 事務局からのお願い II

◆会費の振込みが未だの方は、早急に振込みをお願いします。封筒表面にあるラベル上の数字は、2月14日現在の会費未納額です。ご参照ください。

## 研究ノート

### 美術教育における「伝統と革新」：ヴィジュアル（ポップ）カルチャーを取り巻く現状と今後

徳雅美（カリフォルニア州立大学チコ校 芸術学部美術教育学准教授）

人文学、特に美術系では、昨今どこもかしかも「ヴィジュアルカルチャー（Visual Culture: 視覚文化）」という言葉のオンパレードで、この言葉に食傷気味の人も多いに違いない。しかしながら、アート（芸術）の定義の拡大に伴い、美術教育の扱うべき主題種類が拡大してきている中、21世紀に入って最もトレンドなテーマの一つは、美術教育においても、やはりこの「ヴィジュアルカルチャー」もしくは「ヴィジュアルポップカルチャー」（Visual Pop-Culture: 視覚大衆文化）である。

#### 1. ヴィジュアルカルチャーとは：

ヴィジュアルカルチャーとはどういう意味なのか、そして美術教育の中ではどのように取り扱われているのだろうか。元来この学問領域は、特定分野を超え「カルチャースタディー、美術史、文化人類学」など多彩な領域にまたがっており\*1)、基本的に「ヴィジュアル（視覚）イメージ」を媒体として、各々の分野の中で、社会への影響を問う形で語られることが多い。1970年代、イギリスで火がついたこのテーマ\*2)は、社会的影響を問う「視覚イメージ」を扱うということで、伝統的な美術題材に加え、映画、テレビ、ビデオゲーム、コミック（マンガ）、広告、インターネット等々、視覚的な題材であれば何でもありで、増々そのテーマの解釈は拡大し、個々の学問領域を超え研究されている。美術系一般においては、従来のファインアート（芸術）と比較して解釈されることが多い。つまり伝統的に芸術として認められたファインアートとそうでないアート（工芸、クラフト、フォークアート等）、そしてまた高級と低級芸術\*3)の比較において従来語られてきた美術芸術をより身近なもの、私たちの社会に日常的に存在する視覚イメージ全般について問いていくものである。美術教育においては、こどもたちの認知に最も影響の大きいポップカルチャーとしての「視覚イメージ」とそこから派生する関連物もまた対象として、美術教育テーマとして取り扱おうとしている。

#### 2. 美術教育における「ヴィジュアルカルチャー」の定義と意義：

このように対象となる範囲が「視覚イメージ」という言葉の元、多種多様であることから、美術教育においては、「ヴィジュアルカルチャー」の定義はまだ定着しておらず、その定義、解釈、範疇、さらにはカリキュラムとしてどのように取り扱うかは各国各文化によって異なっている。例えば、米国の美術教育においては、大衆文化またその視覚イメージを社会現象の鏡として認知し、そこに潜む社会問題を読み解いていこうとする 批評鑑賞の形、「ヴィジュアルリテラシー（Visual Literacy）」\*4)を高めるという目的で取り入れられている場合が多い。一方日本においては、社会に氾濫する「視覚イメージ」や「関連グッズ」を通して社会問題を読み取るというより、ヴィジュアルカルチャーに関連する題材、教材を使用して自分を表現するという方向に応用されていることが多いようである。題材としては特に「ヴィジュアルカルチャー」イコール「マンガやアニメ」として捉えられがちである。がマンガやアニメも「ヴィジュアルカルチャー」の範疇の一つに過ぎない。しかし矛盾するようだが、日本においては、視覚文化の中心を担うのがマンガであるのも事実である。

ウィルソンがかつて日本のマンガを「ライズン（rhizone:本来植物学用語で根茎のこと）」\*5)という言葉で表現し、無自覚に広がり増殖連携しあう媒体として、マンガの影響力を的確に捉えたことは、言い得て妙である。今世界にJ-ポップとして広がりつつある日本の若者文化の中心がマンガであり、また形を変えて各国で発展定着しつつあることを私たちもまたきちんと把握していくことが大切である\*6)。

しかしまたマンガが日本文化の中で、突然現れたわけでは決してなく、日本の伝統美術の流れを引き継いで発展し、他国のコミックとはまた異なった独自のマンガの世界を作り出したことを伝えることも忘れてはならない。「伝統（Tradition）」と「変革（Innovation）」は対立するものではなく、一つの流れの中で同等に存在するという真理。今世界で最も影響力のあるメディアとして認められた日本発信のマンガが、日本美術における「伝統と変革」の一つの例として、美術教育の中で示してみることは必要なことかもしれない。またマンガをはじめとするヴィジュアルカルチャーが、いかにこどもの認知や美意識の発展に影響を与えるかなど、その因果関係を美術教育の中の研究テーマとして扱うことの必要性を強く感じる。

### 3. 「ヴィジュアルカルチャー」研究&関連プロジェクトの今後と可能性：

このように日本と米国と二つの国を比較してみても、「視覚大衆文化」の定義解釈とカリキュラムへのアプローチも様々である。さて少し話を戻したい。私がなぜ「ヴィジュアルカルチャー」に関する研究を始めたのか。きっかけは1990年代初頭 大学院の必須コース「Children's Artistic Development (こどもの描画発達論)\*7)」の中で日米のこどもの描画に表現される空間構築方法の発達過程を比較したことに始まる。結果、日本のこどもの描画にのみ顕著に表れる特異的表現方法、そしてその原因が、マンガ(視覚大衆文化)からの影響にいきついたことによる。このように当時は他の多くの研究者がそうであるように、自分の専門分野である美術教育や発達論に関連して入り込んだ領域であった。現在皮肉な事にマンガの世界的人気とともに、美術教育以上にこのテーマを中心に仕事をする人が多くなった。しかし今でも研究目的はヴィジュアルポップカルチャーがこどもの認知発達に(そして社会全般に)どのような影響を与えるのかであり、それを元にこどもの心身ともに健康な発達のために、どういう美術教育カリキュラムを作成すべきなのかが最終目標である。

さてそのヴィジュアルカルチャー関連のプロジェクトとして、2005年から2007年にかけての2年間、北米を西から東海岸へと巡回する形で、マンガの表現力と影響を紹介する少女マンガ展示会「Shojo Manga! Girl Power!」を実施することができた。展示会目的は、戦後から現代にいたる過去60年間を振り返り、少女マンガに最も影響を与えた23人の作家の少女マンガ原稿二百余点を元に、少女マンガの発展そしてそこに表れる主題の変化を通して、日本女性の願望役割の変化を北米社会に問うものであった。2007年北米9カ所の巡回を終え、2008年2月より、日本巡回が始まる。日本巡回においては、先の目的に加え、海外において日本のマンガがどのように広がり、そして若者文化の中で受け止められているのかを紹介する展示会ともなっており、川崎、新潟、京都、高知と4カ所を巡回することが決まっている。\*8) 特に巡回地3番目、京都国際マンガミュージアム(7/19-8/31)では、第32回 InSEA 大阪大会(8/5-8/9)の時期を含んで開催できる運びとなった\*9)。この学会は世界40余国から美術教育並びに美術館教育に関する人々が参加する、3年に一度世界の大都市で開催される有意義なものである。海外からの学会

参加者にも、この展示会に足を運んでもらえたらと願っている。またこの InSEA ワールドコンgresで、特別シンポジウムの一つとして「ヴィジュアルカルチャー」をテーマに開催できることとなった。このシンポジウムを通して、認知発達における基礎研究も含め、多角的な視点による美術教育への可能性を紹介できれば幸いである。

註：

- 1) Interdisciplinary Study (もしくは Cross-disciplinary Study) : 日本語では「越境の学問」もしくはボーダレスの領域と訳される。
- 2) : 例えば著名な関連出版物として John Berger (*Ways of Seeing*, 1972)や Laura Mulvey (*Visual Pleasure and Narrative Cinema*, 1975)がある。
- 3) : 「ハイ & ロー (High & Low)」と言われるように「高級芸術」か「低級芸術」かの対比する形で芸術作品を明確化してきた傾向も、近代芸術の分野ではその境界線はしだいに失われ、明白に分けることは困難になってきている。
- 4) : ヴィジュアルリテラシー (Visual Literacy) : この言葉は1969年にはじめて Zach Floni に定義された概念(“Visual literacy refers to a group of vision-competencies a human being can develop by seeing and at the same time having and integrating other sensory experiences.”)特に芸術、教育学において多用される概念。一言で言えば「視覚イメージ」を通して認知思考力を高める能力。鑑賞教育学の Sayer によるとさらに発展して、「視覚イメージ」への自分の嗜好を理解し、最終的には自分の美意識の因果関係を発見する能力としている。
- 5) : Brent Wilson (元ペンシルバニア州立大学美術教育学教授)は、米国における著名な美術教育者の一人。こどもの認知に与えるマンガの影響について海外で紹介した最初の研究者でもある。
- 6) : 日本のマンガやアニメ人気は、海外において、同人誌を含むコミックマーケット人気へと波及。そこから派生したコスプレ(コスチュームプレイ)が大きな人気を集め、各国特に南米においては最も人気の高い若者文化として独自に定着しつつある。またこれら日本のマンガをオリジナルの日本語で読みたいという日本語習得熱が高まり、各国の日本大使館ではマンガ&アニメ関連イベントを開催して、日本文化交流の大きな手段としている。
- 7) 詳細はヴィジュアルカルチャー研究サイト参照: **Visual Cultural Research in Art and Education** : <http://www.csuchico.edu/~mtoku/vc>
- 8) 日本巡回展示会スケジュールは下記の通り。
  1. 川崎市民ミュージアム (2月16日~3月30日)
  2. 新潟新津市美術館 (4月12日~5月25日)
  3. 京都国際マンガミュージアム (7月19日~8月31日)
  4. 高知市文化プラザカルポート内 横山隆一記念美術館 (9月6日~11月9日)\*詳細については「少女マンガ巡回展示会」サイト参照: [http://www.csuchico.edu/~mtoku/vc/Exhibitions/girlsmanga/ka/girlsmangaka\\_index.html](http://www.csuchico.edu/~mtoku/vc/Exhibitions/girlsmanga/ka/girlsmangaka_index.html)
- 9) 第32回国際 InSEA 学会大阪 (International Society for Education through Art: 「美術を通しての教育」): <http://www.convention-j.com/InSEA-WC2008osaka/>